別海町立野付小学校　学校便り

三角帆

◆発行責任者　校　長　青坂　信司

◆発　行　日　平成２３年１２月２２日

平成２３年度学校テーマ「学び続ける学校」　第１０号

人は、つながりの中で生きている

校　長　青坂　信司

◆朝、遠くから「グワッ、グワッ」と鳥の鳴き声が聞こえる。どこか悲しげな鳴き声だ。「これは、きっとオオハクチョウの声なのだろうな」と思って、その声の方向を見る。支所、プールの方向から、校長住宅の方に向かってくる。たった１羽だ。「グワッ、グワッ」と何度も鳴きながら、寒気に包まれた朝の晴れ渡った空を飛んでいる。そのオオハクチョウは、校長住宅の上、そして小学校の体育館の上を通って、野付半島を目指して飛んで行った。ずっと鳴きながらだ。

◆私は、そのたった１羽で飛んでいくオオハクチョウの姿を見ながら、何か悲しげな気持ちになっていた。群れから離れたのだろうか。いつもは群れでＶの字になったり、一直線になったりしながら飛んでいるオオハクチョウの姿を見ているだけに、たった１羽のオオハクチョウを見て、大丈夫なんだろうかと思った。

◆そんな気持ちを抱きながら、学校の玄関に近づくと、遠くから「おはようございます」という大きな、そして元気で明るい声が聞こえた。一人ではなく、３・４人いる３年生を中心とした子たちだ。朝、私の出勤時刻と大体同じ子たち。よくその女の子たちと出会う。そして、出会うと欠かさず明るく元気に挨拶してくれる。その挨拶の声を聞くと、いつも元気をもらう。私も笑顔になれる。子ども達から「幸せ」を分けてもらっている、そんな感じだ。

◆たった１羽で飛んで行った悲しげなオオハクチョウ。そして、明るく元気に挨拶してくれた子ども達。そのあまりにギャップのある光景を見た時、私には「つながり」という言葉が浮かんできていた。

◆これを書いている１２月１９日、教頭先生から「春に千島桜を描きに東京から来た方から、作品のコピーが届きました」という報告を受けた。私の机の上に置かれてあった作品のコピーを見たら、それこそ素晴らしい出来栄えの「千島桜の絵」であった。満開になった千島桜の１枚１枚の花びらが丁寧に描かれ、写真とは違う千島桜の存在感が私に伝わってきた。大地に根を下ろし、太い幹から枝が生え、そこに沢山の花びらが付いている。千島桜の生命感が、その絵の中にあった。

◆作品のコピーと共に、丁寧なお手紙が入っていた。「日本一の千島桜の見頃に逢う事ができ幸運でした」「今回、満開時に訪問でき、その偉容にあらためて感銘を受けました」「厳しい環境の中で百年を生き抜いた千島桜の姿には到底およびませんが、作品のコピーをお送りいたします」といった文が並んでいた。何とも謙虚な文章で、その方のお人柄が伝わってくるようだ。石川進造さん。ものづくりの分野で内閣総理大臣賞を受賞され、小泉前総理から、直々に「現代の名工」として表彰された方である。そのような方が、半年以上前に野付を訪問し、その後作品が完成しても、忘れずに、野付小にお手紙と作品のコピーを送ってくださった。その姿勢に感銘を受ける。

◆二学期、多くの方々との出会いがあった。野付ネイチャーセンターの職員の皆さん、北海道医療大学の先生、漁組の皆さん、別海高校の先生方、北海道教育大学の先生と学生の皆さん、郷土資料館の石渡さん、郷土史家の戸田さん、「鳥博士」の藤井先生等々、子ども達のために多くのことを伝えてくださった。外部の方以外にも、野付の子ども達のためにと読み聞かせサークル「ねぎぼうず」が立ちあがった。

◆どれもこれも素敵な出会いであり、今後とも素敵なつながりにしていきたいと思った。人は人とのつながりの中で生きていく。その人と人とのつながりを大切にする教育に、もっともっとしていかなければならないと思った。自戒するばかりである。良いお年をお迎えください。